



ページごとに感嘆が止まらない 輸液・水電解質の実践書

評者 小松康宏 板橋中央総合病院副院長 / 群馬大名誉教授

本書を手に取り読み始めると、数頁ごとに「うわー」「うわー」と感嘆してしまう。輸液・水電解質の基本と臨床の実際とを、著者の深い知識と経験のもとに、それを気づかせないようなさりとした文体で、読者にとってわかりやすいように書かれているからだ。学生や研修医は気軽に読めるだろうし、指導医クラスは行間に埋もれている腎生理学に気づくとともに、自らの経験を思い返して納得することであろう。

私は、学生時代から輸液・水電解質に関心をもち続けてきた。臨床実習で提出したレポートは「麻酔と電解質異常」で、卒後、医師になってからも輸液・水電解質の勉強は楽しかった。いくつかの解説書も出版させていただいたが、今回、長澤将先生の書かれた本書を読み、もう私の出番はないと感じた次第である。

輸液療法は最も頻回に指示される薬物療法であり、輸液関連インシデントは医療安全上の課題でもある。血清電解質濃度異常は最も頻回に遭遇する検査値異常であるが、条件反射的に「ただちに是正すべき」と判断することは、不要な検査や治療、業務負担、さらには医原性の新たな問題を生じかねない。ヘモグロビン低下に対し、条件反射的に輸血を指示する医師はいない。同様に、電解質濃度の逸脱に対し、やみくもに検査や治療を指示することは賢明ではない。個々の患者の精神・社会・医学的要因を含めた全体像、さらに生理学、各種検査法の限界を理解したうえで初めて、適切な医療・ケアが提供できる。医療の目的が、「医学的異常の是正」から、「患者にとっての価値の最大化」に変わっている今日、輸液療法や電解質管理も同じ視点が求められる。本書の1章は、このような医学・医療の大原則を確認するところから始まっている。

とは言え、迅速な診断・治療が必要な電解質異常も少なくはない。2章以降は読者に対し、どのように考え、診断・治療を進めるかへと、症例に沿って読者を誘う。本書を読んで、輸液・水電解質の基本を身につけた若手諸君は、ベッドサイドで電解質異常をみた際に、本書を読み直し、基本知識の理解を深めてほしい。さらには、1人でも多くの若手が、本書に示された参考文献、さらには腎生理学の教科書をひもとき、腎生理学や輸液療法の実践、研究を発展させていきたいと思います。著者が薦めている『Clinical Physiology of Acid-Base and Electrolyte Disorders』は、UpToDate®を創設したBurton Roseの著書であり、私は研修医時代に購入した第3版を今も大切に持っている。

「日和らずRA系阻害薬を継続できるか?」「最近アツいぞ低Na血症界限」「何かと話題の皮膚のNa」「フロセミドの使い方」などのコラムは、専門医にとっても興味深い。専門領域にかかわらず、すべての研修医と専門医にぜひ手に取ってほしい書籍である。

G



Dr. 長澤印 輸液・水電解質ドリル

長澤 将=著

定価: 4,620 円(本体 4,200 円+税 10%)
B5・192 頁/医学書院/2023
[ISBN 978-4-260-05296-2]